

平成30年度の東京鶴城会総会・懇親会でお待ちしています！

故郷に想いを馳せ 熱き青春を語り
そして 明日の夢を語ろう

新緑の時季も過ぎ、初夏の陽気さえ感じるこのごろですが、会員の皆様、いかにお過ごしでしょうか。

今年も東京鶴城会総会・懇親会を例年通り、5月の第4土曜日（今年は26日）、霞が関ビル35階で開催いたします。ここは日本の中心部が見おろせる、何か大きなことができそうな、そんな気持ちにさせる素敵な場所です。

東京鶴城会の創立は、一説によると、昭和30年代に宇土中1期生である寺本氏が参議院議員に当選したのを機に設立され、当時、サントリー専務の本田氏もご尽力されたと聞いていますが、真偽は定かではありません。それにしても、60数年の歴史ある同窓会であることは間違いないようです。

当会は、先輩後輩の枠を超えた、楽しく語り合える同窓会を目指していますので、是非、ご都合をつけて出席をお願いいたします。会員の皆様のご参加を心よりお待ちしております。

最近では、参加者の減少傾向に、やや歯止めをかけ、若年層の参加も見られ心強いことです。先日、幹事会を開催し、みんなで総会を運営することを確認しましたが、各幹事の前向きな協力と熱意に感謝します。

今年も『東京鶴城会便り』（第12号）を添えて総会のご案内をできることを嬉しく思います。

会長 田中 幸資（昭和38年卒）

東京鶴城会便り

発行責任者
田中幸資

是非、ご参加ください。
東海大学校友会館で、楽しいひと時をお過ごしください！

楽しいイベント、大くじ引き抽選会等で満喫した時間を
お楽しみいただけます！

平成29年度東京鶴城会フォトコレクション



昨年（昭和63年卒）の大同窓会の年度幹事
（昭63年卒）の皆さんにも
ご参加いただきました。



二次会はイタリアンで大盛り上がり！



今年の東京鶴城会総会・懇親会に
是非、来なっせ！
二次会も、たいぎゃな楽しかですばい。

「同級生仲良し旅行」

高校時代の同級生仲良し4人で、数年前から、年1回の旅行を企画して楽しんでいます。其々の住まいは、私が東京で、仙台、鶴岡、宇土からそれぞれ集合します。1回目の旅行先は、山形の友人が住む鶴岡でした。3人とも山形は初めてでしたので、“修学旅行”気分でした。サクランボの時期に行ったので勿論、サクランボ狩りを満喫しました。有名な佐藤錦以外にも色んな品種があることを知り、その甘酸っぱい、“赤い宝石”と言われるサクランボの味を存分に堪能しました。行きたかったクラゲで有名な加茂水族館にも、友人が案内してくれて、クラゲに癒されとても楽しみました。

2日目は、私のリクエストで1度は行きたかった、イタリアンレストラン「アルケッチャーノ」で、美味しいイタリアン・ランチに大満足でした！季節は6月でしたが、雪を被った鳥海山が印象的でした。

2回目の旅行先は、故郷の熊本天草にしました。（その一か月後に、熊本地震が発生）

天草下田温泉に宿泊しました。宿では勿論、高校時代の話で一晩中？盛り上がり、終始笑いっぱなしでした。

なしでした。

翌日は、オリーブ園見学やイルカウォッチングを楽しみました。しかしながら、当日の海は荒れ模様で波が高かったので、船が揺れて皆んな大騒ぎ（写真）。でも、私以外は初めてのイルカウォッチングで、イルカの可愛さにテンションMAX（最高潮）！でした。天草五橋の展望台で美しい天草の島々を眺め、宇土に帰る途中に、私の大好きな御輿来海岸に立ち寄り、菜の花揺れる展望台から美しい干潟の景色に、友人達も感動しきりでした。ディナーは、城南のレストランを予約していたので、夕日の干潟は諦めて、お腹を満たしに行った城南で、燃えるような夕日を見て旅を終わりました。気の置けない仲良し同級生との旅は最高に楽しいです。今年は、秋に長野、戸隠方面を企画しています。これからも毎年、旅行を続けて、フォトブックを増やしていきたいと思っています。

企画 添乗 昭和47年卒
六本木 祐子（旧姓 萩原）



大宮第二公園での梅まつりと「全国大陶器市」を満喫！

今年2月17日～3月11日の期間、大宮第二公園（さいたま市）で梅まつりと「全国大陶器市」が開催されました。私はゴルフの練習仲間と3人で、2月末に同イベントを見に行き来しました。イベント会場では、数十軒の業者が大型テント内で、所狭しに様々な品物を展示・販売していました。入口付近では、団子、海産物、佐賀県の嬉野茶（うれしのちゃ）、ドライフルーツ、いりこ、海苔、「雀の卵」（すずめのたまご）、しょうが味とりの瓦せんべい等、熊本出身の私としては、子供の頃に戻った気分で“ワクワク”感を抑えることができませんでした。

テント内には、九州各地の陶器（伊万里焼、波佐見焼、有田焼、小石原焼など）、愛媛県の砥部焼、岡山県の備前焼、滋賀県の信楽焼、岐阜県の織部焼、あとは、漆器、木工家具等が数多く展示・販売されていました。

やはり、有田焼や伊万里焼は、絵画の様で目を引きました。一日目だったので、下見とっていましたが、両手の中にやさしく入る湯のみ（織部焼）を2個購入した際、お店の方から「作家は、中垣連次と言う方ですよ」と一筆メモ書きをもらいました。茶たたくも漆器店で布張りの黒を2個購入し、もう一カ所では、デパート納入の残り物らしきもので、値札は4,780円

が1,000円になっている、深め赤絵の和皿を2枚購入しました。

次の日は、最近、会社を退職して、ちょっぴり暇な夫を誘って行ってみました。会場では、前日に顔見知りになった店主・馬場さんの店で、夫用と息子用に陶器製ビールグラスを購入しました。「350ccのビールがちょうど収まりますよ」との馬場さんのアドバイス。最近、朝食はパンにしているのでも、少し厚めのスープカップ、これはコーヒー用にも使えます。近所に住む娘家族にも、少し大きめの取り皿を6枚購入しました。イベントの帰り道、購入した陶器は夫が両手に持ってくれ、私は織部焼の湯のみを1個追加購入し、上機嫌で歩いていたら、不覚にも花壇の手前で転んでしまい、地面に右手と右肩を強打してしまいました。その瞬間は、まるでスローモーションのようでした。「あ～、とうとう老化現象が来た～ッ！」と自分の“老い”を否定できませんでした。傍にいた夫は、慰めの言葉はなく、ただ“失笑”していました。幸い、大事には至りませんでした。ほろ苦い大陶器市の早春を楽しみました。

大久保 千鶴（昭和38年卒）



衝撃的な光景だった。理由がその下に書いてある。「瓦が落ちてくる危険性が高い」とのこと。我が家は瓦がほぼ落ちてしまい、大黒柱が少し傾いてはいたが、住める状況であった。家族に聞くと、「それはそれは大変だった」とのこと。揺れは激しく、非常に長く続いたそうである。多くの人がそれを語っていたが、強さ・長さともにまちまちだったのは、その揺れが誰もこれまで“経験したことのない”揺れであったとともに、みな混乱していたことを示すためであろう。

家の中は、地震後3週間経過していたため、親戚の手伝いもあって、きれいに掃除されていた。障子は横揺れで「ずり応力」がかかったため、すべて破れていた。地震後は障子がずれて障子が動かなかったようだ。幸い、食器棚は揺れの方向が良かったため倒れておらず、テレビも含めて損傷はなかった。驚いたのは、数トンはあると思われる、庭の石が倒れていたことだ。

滞在中は、主に自宅の改修を行った。まずは、すべての障子の張替えをし、上方向に力がかかり、損傷したサッシの鍵をすべて取り換えた。風呂場のドアも損壊したため、シャワーカーテンで応急

処置を行った。

落ちた瓦は、その一枚は非常に重い。聞くと熊本は台風も多いため、瓦で家の重しをして台風に備える作りになっているところが多いという。見れば周りの家は、いわゆる昔の日本造りの家が多く、瓦葺の屋根がほとんどであった。隣の豪邸は見た目はいつもの風格だが、建て替えが必要という。向かいのお宅も土壁がはがれていて、建て替えるという。目の前のモダンな2階建ては、ビクともせずいつものままだった。

聞けば、自宅周囲の同じような作りの家で建て替えを逃れたのは、何と我が家だけとのこと。地震直後、父親が「うちの瓦だけ一斉に落ちてしまい、欠陥住宅だった」と憤っていたが、知り合いの建築士に聞くと、それが不幸中の幸いだったようだ。上物は、屋根が重くて揺らされると被害が大きくなるそうだ。専門家の意見に、納得である。

父親は、地区の長をやっている中での今回の地震で、各方面の対応で疲労困憊であった。自宅には数人、陳情に来た人もいた。(次号につづく)

内山 伸(平成5年卒)

メヒコで時計屋を…

祖母の従妹のとよさんは1935年、二十歳で”写真花嫁”(写真だけで結婚を決めた)となるべく、移民の相手が待つアメリカへ船で渡った。まもなく、第二次世界大戦が勃発し、敵国となったアメリカから、身重の体でメヒコのメキシコシティへ逃れた。その地で「夫と営む時計店が成功して金持ちにならしたごたる、すごかたいな」と熊本の親戚内では、もっばらの噂だった。数年毎に帰国していたとよさんと息子二人の話を聞きたさに皆が集まっていた。「米粉の代わりに、とうもろこしの粉で饅頭ば作ったら、ぼそぼそで食べられなかったよ」等と話しながら、とよさんが胸を揺すらせて「ふひょひょひょ」と笑うと、一同がどっどどよめいたという。子供の私には、外国に住んでいる人だと思っただけで、洒落て見えた。とよさんの発音がそう聞こえたのか、誰でもがメキシコをメヒコと呼んでいた。

私は結婚した翌年に、とよさんを訪ねた。思いのほか質素な暮らしぶりだった。時計店は別の所にあるのか、もう閉めたのか、話題に出なかったので黙っていた。そこに、日本人の友達が大量集まって来て、私達に政治や教育や食べ物などを質問しては、日本は変わったとか、変わらんとか、話に花が咲いた。

お別れの前日、家族だけの夕食にテキーラが出た。度数40度とかなり強い、私は塩と交互に舐める程度。ところが八十歳のとよさんは、美味しそうにおかわりをした。お酒が空気を甘くするのか、みんなの顔が緩んで思いのままに喋っていた。すると酔ったとよさんが突然「昔はね、日本から帰る時におっばいの下に腕時計を隠してね、私は肥えているから十個はOKだったねえ」と呟くように言った。長男の巖さんが慌てて「NO、NO! ママ、違うでしょう」と制した。次男の義男さんもお嫁さん達も、NO、NOと首を横に振り続けた。私と夫はさっとグラスに手を伸ばした。とよさんだけが気持ちよく目をつぶっていた。時々帰国していたのも、必要に駆られての事情があったということかな。内緒、内緒の昔話。

田中久美子(昭和43年卒)



さらば良き友よ

「♪♪下駄をならして奴がくる・・・」

夕方の仕事が終わったあと、新聞販売所の食堂で飯食って、アパートに帰って、近くの銭湯でひとっ風呂浴びて戻って、酒飲んで語りあって・・・また翌朝は4時始動の繰り返しの、アアこれが青春だった。

2017年8月の暑い日の午後、「友」は突然、路上で倒れてさよならも言わないで逝ってしまった。奥さんには「買い物に行ってくるね」と出かけた途中だったようだ。その2週間くらい前に、「また孫が生まれた」と喜んで電話をくれたのになんてこった・・・。

1975年の3月、宇土高を卒業した私は寝台特急「みずほ」、友は鹿児島出身で「はやぶさ」で上京して、働きながら進学のために豊島区の新聞販売所で同じ釜の飯を食う仲間になった。販売所には当時、従業員は約20人いたが、北は北海道から南は鹿児島まで皆、苦学生や浪人生でほとんどが「田舎もん」の集まり。その中で、気が合って43年続いた友だった。

東京6大学の1つに友は入学したものの、ちょうど学生運動がまだ盛んな頃で、休講になることが多く、自分の描いていたのと違った学生生活だったようだ。「つまらん！別の大学を受け直す」といって退学してしまっただが、職場はそのまま続けた。朝までいっしょに酒飲んで自転車の荷台に

折込広告を挟んだ、ぶ厚い朝刊を高く積んでフラフラしながら配達したことも何度か・・・。「(新聞の)不着の電話があったよ！」と苦虫を噛み潰したようなヘンな顔の所長に、また「イエローカード！」こんな青春と一緒に過ごした友だった。

お互い、人生いろいろあったが友達関係は続いた。酒は強かったが、最近ほとんど飲んでないと聞いていた。健康には気を付けていたと思うが若いころのムチャが響いたのか。体調が悪いとは聞いていなかったが、心配無用とばかりに何も言わなかったのか。きっと、何らかの自覚症状やら不調やらはあったはずだと想像して悔やんだ。

還暦とはよく言ったもので、ちょうど暦ひとまわりしたところで「長生きしたけりゃムチャせんて気を付けなせ！」の警告ですね。日々の健康管理はたいしえつ、大事たい。若いとき、ヤンチャな青春を送ってきたキミも「たいぎやにせんてぶっ倒るるけんネ！」やりたいことを好きなようにやって生きる人生もよかけど、残されたひとの大変さも考えんといかんバイ。もっとも、そぎゃん無駄なゲンキは残っとらんかね・・・。

「**ゆっくり楽しんでから、こっちにこんネ!**」と草葉の陰で「友」が笑っとる。

森内忠美（昭和50年卒）



「2017年ろくご会報告」

1965年卒の「ろくご会」では、2017年11月25日に定例の会合を開催しました。場所は、ここ数年と同様の霞会館麻布「旬彩和食かすみ」でした。

港区西麻布は大人の空間を感じさせる、趣のある場所ですが、まさに70歳を過ぎた大人の集まり「ろくご会」には、ピッタリの場所かも知れませんね！

参加者は18名で、宇土からは熊本地震で自宅が被害を受けた永里君が参加してくれまして、ここ数年では多くの参加となりました。元気なうちに会いたい人には会いましょう！元気なうちに話したい人には話しておきましょう！

永里君が会場へのアクセスで場所を間違えるハプニングもありましたが、無事、霞会館麻布に到着してくれました。長野から参加は、幹事の河野浩士君のお世話で「ろくご会」が始まりましたが、ここ数年は、先ず「**黙とう!**」から始まることが多くなりました。

食事は和洋の会席料理で、ドリンクは飲み放題！少しアルコールが回った頃から、恒例の参加者の「近況報告」がありました。参加者の皆さんは、少なからず色々ありますね。特に、永里君からの情報として、2018年に熊本で大同期会を開催する企画があるとのことで、「是非、皆さんの参加を期待している」旨の報告がありました。

案内が近々あると思いますので、興味のある方は是非、ご参加ください。

一昨年(2016年)から「ろくご会」で撮った写真をアルバムにして、参加者全員に配布することにしましたら、大変好評で皆さん進んで「カメラを意識」してくれるようになりました。年を重ねるごとに、このアルバムが楽しい思い出の1ページとなると思います。

飲食と会話を存分に楽しんだあとは、恒例の大カラオケ大会へ。会場は、六本木・カラオケ館へ！存分に歌い語り合っ、締めめの歌は勿論、「**高校三年生**」です。全員で肩を組み合い、青春時代に戻ったところでお開きとなりました。とても思い出に残るひと時でした。

昭和40年卒 境屋由夫



宇土高野球部ガンバレ!

中学生の頃から、高校野球のファンです。1試合ごとに、一球一打にかけた、球児達の熱い感動のドラマがあるからです。春の選抜、夏の選手権大会(通称**甲子園**)の時期になると、私もテンションが上がります!

私が宇土高3年生の時、野球部が夏の大会で県でベスト16まで勝ち抜き、ベスト8をかけた試合(記憶違いかもしれませんが)を藤崎台球場まで応援に行った事は懐かしい思い出です。同級生のピッチャーが『源氏』とニックネームが付く程のイケメンで、密かに彼に恋する友達に誘われての事でした。

残念ながら、その試合は負けてベスト8には進めず、恋の行方もわかりませんが。

※私は光源氏の『ゲンジ』君と思い込んでいたら、つい最近、真相が違っていた事が判明。でも、彼がモテモテだったのは事実でした。

ある野球部出身の大先輩に聞いたところ、過去に、強かった時代もあり、昭和29年頃の大会では、決勝戦で済々黌高校に負けて、準優勝した事があるそうです。

さて、昨今の宇土高野球部の活躍をご存知でしょうか。2013年には、夏の県大会でベスト8まで勝ち進みました。春の選抜甲子園大会には、“**21世紀枠**”と言って、ある程度の試合成績と文武両道、地域貢献などの実績のある野球部を全国各県、各ブロック代表から、3校だけ出場出来る枠があります。

宇土高校野球部は、2009年と2015年に熊本県の代表として選ばれた事があります。残念ながら、ブロック代表までは行かず、甲子園は遠かったけれど...(泣)
2014年には、轟方面に野球部の立派な第3グラウンドが設置されました。公式戦にも使われているようです。昨夏、練習を見学していたら、見ず知らずのオバさんなのに、球児達は爽やかに、きちんと挨拶をしてくれました。さすがです!

余談ですが、息子も小学生から野球を始め、中学、そして某都立高校野球部に所属し、弱小野球部とはいえ、朝練、昼練、放課後練、土日練習試合、二合飯?と辛い思いをしながらも、何とかやり通しました。どのスポーツもそうですが、やり通すには、本人の努力も当然ながら、周りの支えがあっての事、それに対する感謝の気持ちが大事だと、共に学びました。

ともあれ、華々しい甲子園の舞台ですが、そこに辿り着くまでの想像を超える、彼らの努力があっての事でしょう。甲子園は、遠いようで近い!?
宇土高野球部、夏の甲子園、選手権大会に向けてガンバレ!甲子園で母校の校歌を聞く日が、きっと来ると信じています!

赤木さよ子(昭和55年卒)

熊本弁講座 - 「た」編 -



創刊号からシリーズ化した熊本弁講座ですが、益々、好評につき、今回は「た」編です。どうぞ声に出して、熊本弁を懐かしんでください。

- ①「**たいぎな**」(とても、非常に)
「きのん晩な、雨がたいぎゃな降ったばい」
(昨日の晩は、雨がとても降ったよ)
- ②「**たぎる**」(煮立っている、熱すぎる)
「風呂のたぎっとんね!」
(風呂が熱すぎるね!)
- ③「**たっか、たかか**」(高い)
「こん腕時計は、たいぎゃなたかね!」
(この腕時計は、とても高いね!)
- ④「**たまがる、たんがる**」(おどろく、びっくりする)
「昨日、うちん家前で交通事故が起きたけん、たまがったばい」
(昨日、自宅前で交通事故が起きたので、おどろいたよ)
- ⑤「**たびる**」(食べる)
「遠慮せんちゃ、おもさん食ぶったい」
「遠慮しないで、たくさん食べてね」

It's a Kumamoto Dialect

幹事会・事務局からのお知らせとお願い

会員みなさま、お変わりありませんか。

今回、会報『東京鶴城会便り』も12回の発行になりました。故郷の風と香りをお届けしたいと思い頑張っています。今後とも財源が可能な限り、続けたいと思います。

宇土中・高校の卒業生という接点を大事に、人とのつながり、人生の潤滑油としても楽しい同窓会です。さらに発展させましょう。

以下、いくつかのお知らせとお願いです。

- (1) **会報の原稿を常時募集します。**
 - ・あの日・あの時、故郷のこと、こんな人あんな人等、テーマは自由です。発行を楽しみにしている方が多くいらっしゃいます。あなたも投稿してみませんか。
 - ・感想、希望などお聞かせください。気楽にお願いします。
- (2) **住所、氏名などの変更は是非ご連絡ください。消息をご存知の方もお知らせください。個人情報に他に漏らすことは絶対ありません。**
 - ・連絡がないと途絶えてしまいます。
 - ・同期会などの名簿をお送りください。
- (3) **年会費、広告、寄付をお願いします。**
 - ・年会費が活動のベースです。単年度の収支は赤字です。わずかの繰越金で食いつないでいます。
- (4) **総会・懇親会への出席をお待ちしています。**
 - ・同期、知り合いをお誘いの上ご来場ください。お一人様も、もちろん大歓迎です。

連絡先は、封筒の差出人(事務局)へ。原稿は下記のメールアドレスまでお願いいたします。

Email: 坂崎 mori.reds-041205@jcom.home.ne.jp

年賀状へのこだわり

上京した頃、「ハイセイコー」という競争馬に惚れて、競馬にはまりました。(随分、借金もしました…)

子供の頃から絵が“上手”で、いや“好き”で、いつも描いていました。そういう流れで、最初に彫ったのが馬でした。当初は、12年(十二支)彫れば、順繰りに使えたと安易に思ったのですが、(年賀状を)受け取った人が「これは、昔の絵では？」と思われるのが嫌で結局、40年ぐらい毎年、版画を彫っています。一番難しいのが、版木選びと図柄探しです。版木は彫り易く、柔らかい板と彫りにくい硬い板があります。柔らかい板だと色を付けた時に縮むので、硬い板を選びます。(プロではないので、合っているかどうか分かりませんが)

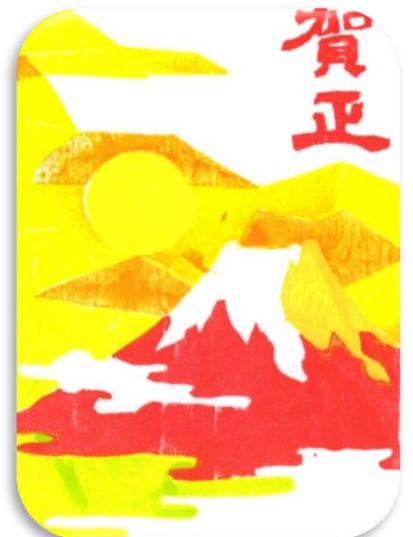
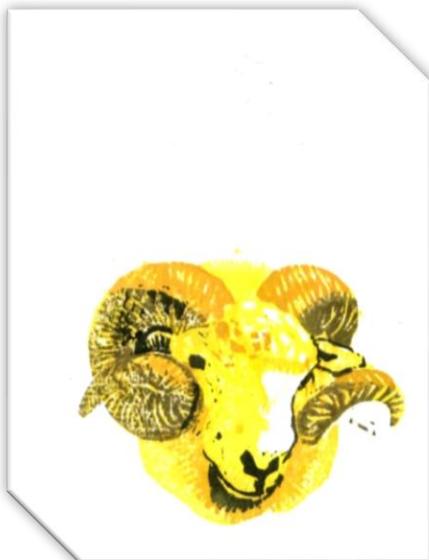
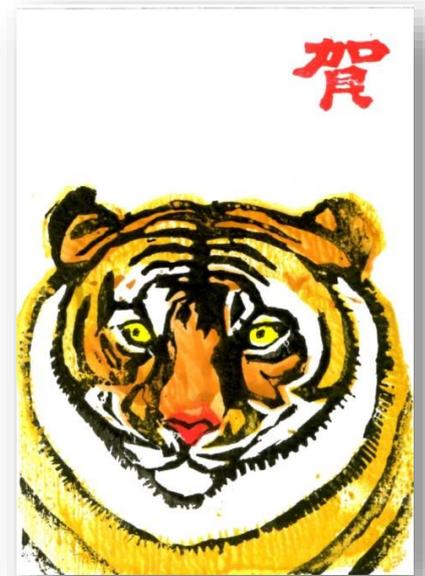
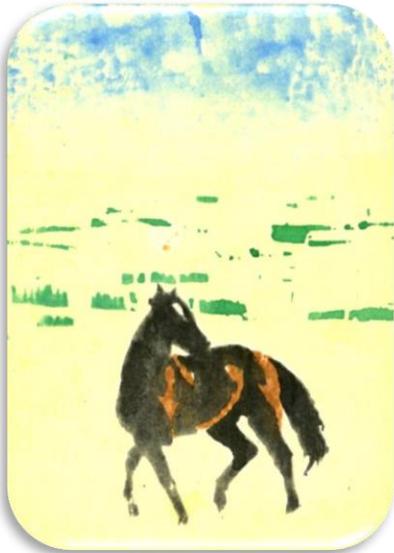
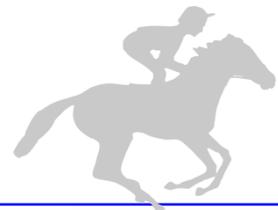
“ザクツ”といかないように、“引きながら押し”彫るので、筋肉痛になる時もあります。

彫るのに2日、50枚程度の印刷に1日かかります。絵にならない干支もあるので、その時は、花や富士山の絵柄が多いです。

宛名と文面を書くのは、夜、酒を飲みながら、“集中して”書くので、文字がダンスしてしまうこともあります。「これも、ひとつの味かな…」と自分勝手？に思っています。

私の作品を貼付しますので、お目に止まったら幸いです。

西本 敏 (昭和44年卒)



東京オリンピックと加齢に思う…

昭和39年4月に宇土高校に入学した。昭和39年といえば東京オリンピックの年である。当時、家に帰ると親からは「テレビ見る時間があるなら勉強しろ！」と毎日言われた。そんな時に学校では、授業の一環として体育館でテレビを観せてくれた。当時の「東洋の魔女」の活躍は、今でも鮮明に覚えている。体育館の床板にじきたくりで座り観戦した。同じ板の間でも、同級生の中には職員室前の廊下に座り、無言の授業を受けた者もいたと聞く。真偽は？だが。

現在では、板の間に1時間近く、じきたくりで座るなんて考えられない。5分もたてば膝と腰が悲鳴をあげ、10分後には立ち上がることもさえないままにならない。最低でも座布団2枚は必要である。

最近、健康診断を受けると、「A」評価が減り「B, C, D」が増えた。内科、眼科、整形外科、歯科どこで言われることは同じだ。「加齢です」「加齢からくるもので仕方ありません」と。我々の年代を診察する医者はある面楽だと思ふ。「加齢です」と言っておけば大きくは外れな

い。こちら「余命×年です」と言われるよりましだと考え自分を納得させている。

最近、衝撃的な事件が自分に発生した。電車の中で立っていたら、よほど疲れた顔をしていたのか若者に「どうぞ」と席を譲られたのである。とうとう、その時が来たのだ。まだまだと思っていたのだが、「世間は甘くなかった」。

前回の東京オリンピックから約半世紀が経った。2年後にはまた、東京で開催される。一生で2回もテレビ観戦できる可能性が出てきた。先日、オリンピックの川柳を見つけた。その川柳をパクリ、自分にあてはめてみた。昭和39年の自分:「東京オリンピックにいきたいなあ」、今の自分:「東京オリンピックまでいきたいなあ」となる。

近くのお寺に「ぴんころ地蔵」があり、そこには「ぴんぴん長生き、ころりと旅立ち。」とある。「そだねー」「いいね」と思い、手を合わせている。

大田敏幸（昭和42年卒）

新・釣りバカ日記“赤いダイヤ”編

好きな釣りはやめられない。自分の都合と海の都合が合えばすぐに実行だ。だが、どこで何を釣るか、以前は走りながら考えていたが、最近では行く前にあれこれ考え、決断が鈍ることが多くなってきた。

今年3月半ばの平日、荒れる合間の凧の日に出かけた。出船1時間前の早朝4時に波崎港の船宿に着いた。釣果が順調なことを反映して、2隻の大型船は各々10数名で満員だ。最近インターネットで情報が確認できるから楽だし、釣り人の思いも同じだ。出船して1時間半、キャビンで寝ている間に銚子沖のポイントに着いた。この日は、風も波も比較的穏やかで、天気も薄曇りと絶好の釣り日和だ。今日の狙いは、中深場の高級魚のアカムツ（ノドグロ）だ。潮回りして、釣り開始のアナウンスがある。

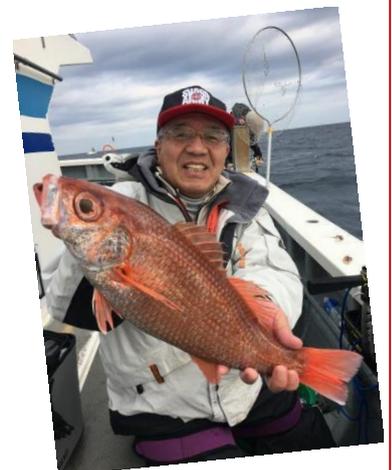
水深は250~310m。狙う棚は、ほぼ底から5m上までを餌はホタルイカ、サバ等をつけて2~3本針で狙う。錘は200号（750g）をぶら下げ、深いので着底するまでに5分程度はかかる。一投目から微かなあたり。波と水深と重い錘で明確なあたりは少なく、竿先に気を使う。魚がかかっているときは、巻き上げるのに7~8分もかかり、ワクワク、ドキドキの時間が長い。

やっと水面下に青白い（実は赤いのだが）魚体が浮かんできた。慎重に玉網ですくってもらい、待望の良型のアカムツ（写真）を手にする。

“ボウズ”（釣果無し）覚悟の釣りだけに幸先が良い。それから、大物を含め順調に釣れ時折、外道とはいえ、おいしい黒ムツも顔を出す。周りの人もニコニコ顔だ。釣果が良いせいか、仕掛けが絡まっても、お互いに笑顔で助け合う。11時の沖上がりまで、私はアカムツの制限数でもあり自己最高でもある10匹と黒ムツを4匹釣った。最大は1.8kgで大型の錦鯉サイズである。旨味に乾杯！

最近女性の「釣り女子」も増えた。この日も若夫婦2組、私の隣には、40歳代の女性が一人で来て楽しんでいた。服装もカラフルでオシャレになった。上下の黒い雨合羽などは見かけなくなった。また、釣りは、ピクニック気分半分だが昔と違い、飲み物はノンアルコールで我慢している。

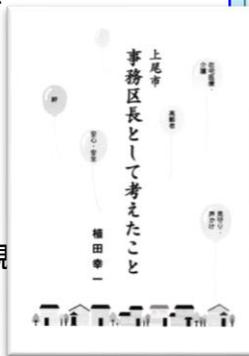
（昭和40年卒 河野 毅）



上尾市事務区長として考えたこと

植田幸一さん(昭和24年卒)は、お住まいのある埼玉県上尾市において、長年にわたり、事務区長(上郷事務区)をお務めになりました。この事務区長は、同市長より委嘱状が渡されて、正式に任命され、準公務員として24時間勤務する激務でもあります。ご本人のモットーは、「事務区長は・・・地域、事務区のリーダーとして、区民の声を聞きながら、安心・安全な街づくりに向かって取り組む必要があります・・・」(添付写真の冊子より抜粋)と述べられています。また、「コミュニケーション」や「助け合いの精神」の重要性も強調されており、現代を生きる人間社会の根本的要件が盛り込まれた、**必読の冊子**です。同冊子(総頁数:30ページ)は、高齢者福祉、地域包括ケアシステム等、5つの項目から構成されています。

今年度の東京鶴城会総会・懇親会の受付にて展示しておりますので、ご興味のある方は是非、当日、ご一読ください。



知ったかぶりの“まめ知識” - vol. 7 -

-知っとんなはっですか? -

「しあわせ地蔵」編

今回は、東京都小金井市の小金井商店街(JR武蔵小金井駅下車)にある、「**しあわせ地蔵**」(写真下)です。この地蔵は、2006年に設置されており、その姿はリュックサックを背負った、今でも歩き出しそうなウォーキング姿で、にこやかな表情がとても可愛いです。

熊本出身の水前寺清子さんの大ヒット曲「三百六十五歩のマーチ」を作詞した、星野哲郎氏が当時、同市に住んでいたことにちなんで、その名が付けられたそうです。銘板には、同曲の一節(「♪しあわせは 歩いてこない・・・」)とお二人(星野哲郎、水前寺清子)の名前が刻まれています。心が“**ほっこり**”する、この「しあわせ地蔵」に会いに行きませんか。



「旧友再会」に“青春万歳”!

私の生まれた八代郡氷川町宮原は、郷土史によれば、『「火の国」の起原は、阿蘇山の火のことで、不知火のことでなく、氷川の「火の川」と呼び、「火の川」の流れる畔りの立神から宮原一帯の「火の村」こそが、火の国の源初だと考えるべき』とあり、火打ち石もよく採れていたそうである。大手広告代理店・電通の創業者である「光永星郎」氏も同郷であり、「健・根・信」の教えは、今でも受け継がれている。また、「西南の役」(1877年)では、この氷川を挟んでの激戦があった。その氷川で泳いだり、釣りをして遊んだ仲間との氷川中学校昭和41年卒の同期会が、今年2月に大阪で開催された。20名の参加があり、その中には、宇土高卒が4名いて、それぞれ、東京、大阪、熊本、鹿児島からの参加だった。「**かがやこう ROUSYUN 広場**」を合言葉に、出席点呼に始まり、体育のフォークダンス、ホームルームのテーマは「氷川中時代の青春話」と「近況」で、全員発表となった。1人3分の制限時間内に、「まだ、よかろう」と延長し、皆大笑いした。

最後に、記念写真と「旧友再会」、「校歌」を合唱して、再会を誓い、万歳三唱で終了した。皆、とても良い顔をしていた。「**青春万歳**」である。

田口達志(昭和44年卒)

むかし、山ガール♪

Hola (オラ)! 数年前、フラメンコを踊った楠村です。ある日、BS NHKドラマで『山女日記』を観ていたら山に登りたくなり、2016年夏に、思い出の上高地に行きました。

『山女日記』は、湊かなえさんの小説です。美しいアルプス山系の風景とともに、登山を通して、男女の人間模様が感情豊かに描かれているドラマです。

数十年ぶりに訪れた上高地の空気はとてもきれいで、“**細胞が生き返る**”ようでした。河童橋からの穂高連峰は、あの頃と変わらずそこにあり...。あちこち散策した後は、もちろん、冷えたビールで乾杯!(Salud!/サルー!)そして“テン泊”。学生の頃は、根性で山に登っていましたが、大人になったから「疲れたらケーブルカー使えばいいし、山小屋に泊まればいいんだ」と分かって早速、登山道具を揃え、去年は丹沢系の大山や高尾山に登りました。

今年も、GW頃から山登りをスタートしたいと思っています。夏には、上高地をベースに涸沢まで足を伸ばし、満天の星空を眺めたいと思います。みなさんも一緒に山に登りませんか。

楠村佳代子(昭和58年卒)



< 編 集 後 記 >

「平成28年熊本地震」から早2年が経ちました。被災地の復旧・復興は、一步一步前進していると信じていますが、今もなお、仮設住宅等で不自由な生活を送っている、被災者の方々を思うと胸が痛みます。復興のシンボル・熊本城の天守閣(大天守)の2019年中の復旧を願って止みません。

東京鶴城会会員は心一つにして、熊本を応援し続けます。「頑張るばい熊本! 負けんばい熊本!」